様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年５月２０日現在

機関番号：１３１０１
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2007～2010
課題番号：19730533
研究課題名（和文）知識基盤社会における読書力を評価するミクロ・レベル・テスト
及び質的分析手法の開発
研究課題名（英文）The Development of micro level test and qualitative analysis for reading assessment in the knowledge-based society
研究代表者
足立　幸子（ADACHI SACHIKO）
新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授
研究者番号：30302285

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、知識基盤社会における読書力を評価する方法を開発することであった。そのために、アメリカ・スペイン・オーストラリアなどの、①ミクロ・レベル・テストを調査する、②読書指導法を質的に分析するという二つの方法をとった。評価の検討、学会での情報収集・学校視察・開発者へのインタビューなどを通して、これらの評価の内容や意義が明らかになり、開発に向けての我が国への応用可能性も示唆された。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to develop reading assessment in the knowledge-society. There are two approaches: 1) to investigate micro level tests for reading, 2) to analyze reading instruction using qualitative methods in United States, Spain and Australia. Through study of assessments, gathering information in congress, observation children in school, and interview of developer of tests or instructional methods, I can clarify the contents and signification of these assessments. The result suggests partial possibilities that we can use these tests and qualitative methods.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	1,500,000	0	1,500,000
２００８年度	660,512	198,153	858,665
２００９年度	900,000	270,000	1,170,000
２０１０年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
総　計	3,960,512	738,153	4,698,665

研究分野：国語科教育学・読書指導
科研費の分科・細目：教育学，教科教育学
キーワード：読書力，パフォーマンス評価，Benchmark Assessment，国際児童文学，ミクロ・レベル・テスト，質的分析，国際情報交換，アメリカ・スペイン・オーストラリア

１．研究開始当初の背景

知識基盤社会の現代においては、あらゆる活動が知識や情報を直接的な基盤となるため、読書力を十分に育むことが極めて重要である。従来我が国では「読書」という領域は言語に依存する割合が高いため、国際的な規模での研究は難しいとされてきた。ところが、2000 年・2003 年・2006 年に OECD（経済協力開発機構）が実施した生徒の学習到達度調査（PISA）によって、読書も国際的な規模で研究されうるものであることが示された。国際読書力テストの存在（例えば、国際到達度評価学会の PIRLS など）は、国際的な評価の結果から、国内の教育政策を研究する動きを加速化している。

知識基盤社会における「読書」とは、必ずしも活字化された書籍を読むことにとどまらない。インターネットや、インフォメーション・ブック、グラフィック・ノベルズなどを用い、様々な媒体を通して読書反応を示す

必要がある現代は、まさに「マルチリテラシーズ」という様相を呈しつつある。このような状況下にあって、国際読書学会及び米国読書会議などの国際的で学術的水準が高い学会では、多様な読書状況をとらえようという質的分析研究が盛んになってきている。本研究は、このような動向をふまえ、読書指導を進めていくための基礎研究として、読書力評価の研究を行うものである。

２．研究の目的

ミクロ・レベルのテストを収集し、マクロ・レベルのテストには覆いきれないどのような点を補おうとするものなのかを分析する。また、諸外国のテスト開発者をインタビューしたり、その利用実態を観察したりすることによって、同じようなテストが我が国での読書力に有用であるか、有能な場合はどのようにすれば我が国に適したテストが開発できるのか、その開発可能性を探る。

さらに、質的分析手法を用いた読書の評価として定評が高い諸外国の研究者の研究を分析したり、その研究に参加したりすることによって、読書指導法における質的分析の可能性を検討する。

そこで本研究では具体的に次の２点について明らかにする。

(1) ミクロ・レベルのテストの研究

読書力評価に関して諸外国の研究所や業者が制作しているミクロ・レベルのテストを収集する。開発者にインタビューして、そのテストの内容を分析するとともに、テスト作成の意図・利用実態等を調査する。本研究は、まずテストの収集から始めなければならないので、明らかにできる範囲は、テストの意義の解明と日本への応用可能性の検討までである。

(2) 読書指導法における質的分析手法の研究

研究代表者がこれまで研究してきた読書指導方法のうち、グループ・ディスカッション方式のもの（読書へのアニマシオン、リテラチャー・サークル、ブッククラブなど）において、各国の研究者がその読書指導方法でつけた読書力を学会で発表するときに、証明手段として質的分析手法（会話分析・グランディッド・セオリーなど）を用いることがある。本研究で検証するのは、この質的分析手法の読書力評価としての我が国での応用である。アメリカの Havey Daniels 氏、Junko Yokota 氏（ナショナルルイス大学）のブッククラブ研究 Taffy Raphael 氏、William Teale 氏（イリノイ大学シカゴ校：UIC）、、国際児童文学に関する読書研究プロジェクトに参加し、質的分析手法を体験し、我が国で同様の手法を試行し、質的分析手法の読書力評価としての有効性を明らかにする。

３．研究の方法

(1) ミクロ・レベル・テストの研究方法

オーストラリアの ACER、スペインの INECSE、アメリカの学会等で情報を集め、英語圏・スペイン語圏のミクロ・レベル・テストを購入する。それらのテストを分析し、素材・問題の作り方・背景理論の分析を行う。可能であれば、開発に携わった研究者や業者にインタビューをする。そのことによって、ミクロ・レベル・テストの読書力評価上の特性を解明し、さらに、日本の現状と照らしあわせて、日本に導入する可能性を探る。

(2) 質的分析手法の研究方法

グループ・ディスカッション形式の読書指導方法のうち、スペインの「読書へのアニマシオン」、アメリカの「リテラチャー・サークル」「ブック・クラブ」に焦点をあてる。これらの指導方法を実施していく上で、子どもの読書力をどのような場面でどのように評価しているかを検討する。

我が国において、「読書へのアニマシオン」「リテラチャー・サークル」「ブック・クラブ」を小学校及び中学校で実践したり、教員研修の場で模擬授業的に実践したりしながら、同様の読書力評価が可能か実地に調査する。

当初は計画していなかったのだが、読書指導の方法を実施しながら質的分析の方法を模索する中で、初読の過程及び読書反応を比較研究する必要性が明らかになってきた。教師や大学院生の読書反応や初読行動を比較研究することにより、そこで行われている読書を質的に分析する可能性を追究する。

４．研究成果

(1) ミクロ・レベルのテストの研究

アメリカ・オーストラリア・スペインなどので行われた学会・学校視察・研究所視察などを経て、次のテスト及び評価についての情報が得られた。

①Accelerated Reader (AR)及び Scholastic Reading Inventory (SRI)

アメリカの Renaissance Learning という業者が開発した Accelerated Reader(AR)は、コンピュータを用いた読書テストである。これは読みやすさ（Readability）などによって段階づけられた本に、それぞれポイントがついている。子どもの側は、これらの本を選んで読み、10 問のテストに答えるようになっている。10 問の設問はコンピュータで制御されていて、4 択形式で答えるようになっている。その本を読んできて、初めて、答えられるような設問ばかりである。いくつかのバージョンがあり、子どもが同じ本を読んできたとしても、異なる問いが出てくるようになっている。子どもは、コンピュータ上で問いに答えるので、子どもの解答はデータとしてコンピ

ュータに保存される。教師の側から見れば、自分の担当の子どもたちの読む本の傾向が分かる。その子がどういうタイプの問いに間違えるかを見れば、その子の弱点（＝指導していかなければならないポイント）が分かるような仕組みになっている。

一方、Scholastic 社の開発した Scholastic Reading Inventory (SRI)も同様にコンピュータを用いた読書評価プログラムである。幼稚園(K)から 12 年生までを対象としており、Lexile という方法で段階づけられた読書能力を評価することができる。そこで得られた情報を、読書指導に直接還元することを目的に作られたものである。本研究では、SRI を購入し、サーバー上で運用を開始し、SRI ではどのような読書力を評価しているのか、そして、評価データはどのように収集・分析されているのかを検討した。その結果、米国においては、ミクロ・レベル・テストであっても全米規模でデータを集積し、そのデータとの比較によって読書力を測定するオンラインシステムが用いられているということがわかった。筆者が視察した学校では、AR の代わりに SRI を用いていると担当教諭が述べており、この両者は基本的に同じ機能を果たすものと考えられる。

②Developmental Assessment Resource for Teachers (DART)

DART はオーストラリアの教育評価研究所 Australian Council for Educational Research (ACER) が作成した評価で、その名の通り、教師のための開発的評価リソースである。これは、本研究がスタートする以前にも小学校中学年レベルのテストを分析したことがあったが、本研究においては高学年（第５学年及び第６学年）用を分析し、かつ、作成者の一人である Juliette Mendelovits 氏にその内容や意義について直接インタビューすることができた。その結果、問題の枠組みだけではなく、各設問の難易度の設定の仕方が明らかになった。特に、その難易度の基準が『オーストラリアの学校のための英語プロファイル』(English-a curriculum profile for Australian Schools, Curriculum Corporation, Victoria, 1994)という国の統一カリキュラムに向けた試作的な基準に基づいていることが明らかになった。

この他、ACER のミクロ・レベル・テストとして、Progressive Achievement Tests in Reading: Comprehension and Vocabulary も購入したが、時間の都合上、十分な分析はできなかった。

③Peabody Picture Vocabulary Test (PPVT)

アメリカを初めとする英語圏で比較的よく見られる読書力テストには、下位分類として、印刷物についての概念(Concept About Print)、発音への意識(Phonemic Awareness)、アルファベットの理解(Alphabetic Understanding)、流暢さ(Fluency)、綴り(Spelling)、語彙(Vocabulary)、読解(Reading Comprehension)などがある。このうち、日本語の言語特性を考慮して参考になるのは、語彙力(Vocabulary)テストである。アメリカの代表的な語彙力テスト Peabody Picture Vocabulary Test (PPVT)－Ⅲを入手し、検討することができた。PPVT－Ⅲは、PPVT-Ⅲは、ある語彙を聞いた子どもが、その語彙を最も適切に表現している絵を４つの絵の中から選び出すというテストである。測定者は、子ども一人と対面で座り、口頭でその語彙を言う。子どもがふさわしい絵を示すという形になる。いわゆる物の名詞だけでなく、動詞や多少抽象的な語彙も測定できるように、工夫がこらされており、理論上は、３歳以上 90 歳未満の人の語彙力を測定できるとされている。このテストは、その語彙を理解できているかどうかを測定するものであって、いわゆる表現語彙は測定しない。しかし、読書指導に重要なのは、まずは理解語彙であって、このようなテストを用いることは、診断テストとして意味があることと考えられる。

これを我が国に直接応用するためには、語彙の難易度等の設定や、語彙習得のメカニズムの解明といった研究が行われなければならない。しかし、語彙力が読書力の一つとして位置づくということを視野に入れることができた。

④Qualitative Reading Inventory-III 及び VI、Reading Inventory for the Classroom

QRI-Ⅲ(改訂版 QRI-VI)を購入して分析した。これらは a 単語のリストと、b「レベル」が設定されている本文と、c それにもとづく質問項目、の３つからなっている。a では、子どもにそのリストにある単語を音読させ、発音への意識や、本文のテーマに関する語彙力がどれくらいであるかを判定する。b には、物語文(narrative)と説明文(expository)がある。それぞれが読みやすさ(readability)によって、完全に段階づけられている。c には、まず読む前の設問として、内容設問（Concept Question）がある。ここで、そのテーマに関する先行知識を問うものがある。さらに、読む速さや読み誤りを測定する running record がある。読んだ後の設問としては、その物語文や説明文の内容を複数の質問によって再現（retell、recall）させるものとなっている。その再現のレベルの判定は、子どもが再現を話している時に、どのような内容・単語が出てくればよいのか、一目瞭然の単語や句の一覧がある。教師は、子どもの再現を聞きながら、その一覧にチェックマークをつけていけばよいのである。以上のことをすべて終えた後、すべての設問はポイント化されているので、そのポイントを計算することに

より、教師はその子どもがこのレベルをクリアしているかどうかを判断することができるようになっている。この総合的な診断テストをいくつか行ってみると、その子の読書力のレベルや長所や短所が診断できるようになっているのである。また、Reading Inventory for the Classroom も、QRI に似た構成となっている。a 沈黙させて読解内容について答えさせる設問の部分、b 音読させて、間違いを書き取っておく部分、cab の結果から判断を下す部分から成り立っている。観察から分かる基本的な音読態度、分かりにくい単語を発音しようとする態度、音読速度、黙読語の読解によって、そのレベルが子どもにとって難しいのか簡単なのかの判断を下すものである。

これらの Inventory 系のテストの強みは、レベルの設定である。レベルを設定しまうことによって、教師は、同じレベルのテストを複数回用いることができる。すなわち、教師がこれから指導していく前にも、指導している途中にも、指導が終わった後でも、同じレベル（あるいはそれより高いレベル）のテストを使用することで、その子どもの読書力が向上したかどうか、判定することができるのである。

⑤ The Fountas & Pinnell Benchmark Assessment System

これは、読書力のレベルを表すベンチマーク（指標）に対応する本があり、子供がその本を読んで教師の質問に答えていくもので、その本を読むに足る能力があるかを測定するテストである。テストの方法は次の 4 点を順に行っていく。

a ランニング・レコード（running record）

ランニング・レコードは、子どもに本を音読させ、いくつの語を正しく音読することができたか、いくつの語を間違ってしまったのかを計算するというものである。この評価法は、綴りと発音が一致しにくい英語において、これを一致させていく初歩の読みの教育(phonics)を反映している。しかし、間違ってしまった語はどのように間違ったのかを丁寧に見ていくことで、子どもの読みの能力や習性を見ていくというものである。意味（M＝meaning）上の間違い、構造（S＝structure）上の間違い、見た目(V＝visual)の間違いがある。

b 読みの流暢さ(fluency)

読みの流暢さは、どれくらいの速度で音読ができたかということを示す。ある程度の速さで decode して音読ができないと、内容理解が伴わないという研究成果に基づいて、このような評価法が重視されている。

c 音読後の会話(conversation)

子どもの音読が終わった後、教師は口頭（会話）で、テクストの中に解答がある設問、テクストを越えた（テクストの中に解答がない）設問、テクストについての設問の 3 種の設問を子どもに対して行う。子どもは口頭で解答することで、音読しながらどれぐらい内容が理解できたかを評価する。

d 書くこと

読んだ本をもとにした質問に基づいて、子どもは作文を書く。書く量は最大レターサイズ（A 4 判にほぼ同じ）1 枚で、20 分以内である。

以上のことから、Fountas & Pinnell Benchmark Assessment は QRI と非常に似ていることが分かる。しかし、1 ページ程度のテクストではなく、4 ページ以上のベンチマークの本を用いて読書レベルを測定していることと、書くことを読むことの評価に位置づけていること、Irene Fountas 氏と Gay Su Pinnell 氏が開発したガイディッド・リーディング(Guided Reading)という 6 人のグループで行われる読書指導の方法に直結していることである。QRI 以上に、読書指導の方法の改善が意識されているし、事実、この評価に基づいて読書レベルを設定した学級文庫のサービスなどもアメリカでは行われている。同様の Benchmark Assessment は、オーストラリアの学校における教室でも使用されていて、このような総合的な評価が、教師の指導に直接役立っていることが明らかになった。

⑥本を読んで問いに答える評価（確認テスト）の開発

以上の 5 種類のミクロ・レベル・テストをもとに、我が国で活用可能な評価を考察してみた。それは、①のように、本を読んできた子どもたちが問いに答えるというもので、小学校から高校レベルの 23 種の本について、10 問の問いに答えるテストが 2 種ずつ開発できた。しかし、小学校の分は少なく、今後もさらに開発が必要である。また、Lexile Framework などのレベル設定についてができないため、これらの設問を実地に小学生・中学生・高校生に試行して、改善していくことが必要である。

また、QRI や Benchmark Assessment が読書指導の改善を直接示唆しているのも重要な点である。Benchmark Assessment が含んでいた口頭の質問や書くことの評価は、読書指導の方法に織り込んで使用する可能性を示唆するものであると言える。

(2) 読書指導法における質的分析手法の研究

①読書へのアニマシオンを用いた評価

上記のように、読んできた本について問いを作っておいて、その答え方を見ることで、読書力を診断することができるならば、スペインで生まれた読書指導法の「読書へのアニマシオン」は、まさにこの評価を読書指導法

として実現しているといえるであろう。ただし、上記のミクロ・レベル・テストは、登場人物について、セリフについて、描写についてなど、あるいはテクストの内容について、テクストの外にある知識について、テクストの形式についてなど、読書に関する様々な側面を多様な設問で問うものであった。それに対して「読書へのアニマシオン」で用いられる作戦という指導手法は、「いつ？どこで？」「その前に何が起きた？」など、読書の特定の側面に集中的に焦点をあてた設問を使用する。当然複数になった設問の中には様々な難易度の設問が存在することになる。その整理をしながら、「今読書のどのような側面を評価しているのか」「この設問に子どもはどのように解答しようとするのか」に留意すれば、一種の読書力評価として使用することができるであろう。

②Literature Circles、Book Club の評価

Literature Circles (LC)や Book Club(BC)はアメリカを中心に行われている、グループ・ディスカッション形式の読書指導法である。様々な論者がいるが、Daniels 氏の LC では役割シートやノートに、ある程度の長さで区切ったところの読書の経過が記される。同様に Raphael 氏らの BC では、Think Sheet や Share Sheet と呼ばれるワークシート、あるいは意味マップやキャラクターマップといったグラフィック・オーガナイザーが用いられる。これらの途中で書かれたものを手掛かりにして読書行為を評価することができる。グラフィック・オーガナイザーということで言えば、ノンフィクションの読書指導で用いられる KWL という指導法も、K（知っていること）、W（知りたいこと）、L（読んで分かったこととまだ分からないこと）を書くことで、読書過程を紙面に示すことができる方法である。この方法は、読書の仕方を教える読書指導法であると同時に、どのように読書をしたかを評価できる評価手法としても用いることができる。

なお、開発者の Raphael 氏は研究代表者のインタビューに答えて、「意味マップのノード(つなぎ目)を数えるといった、量的で客観的な評価の方法もあるが、自分が実施している BC ではそれは行っていない。やはり、量的な分析が、読書内容を評価しているとは言い切れないからである。それよりも、ディスカッションの時の質的な内容を分析がよい。」と述べている。

ディスカッションなどの質的分析については、会話分析の手法が一般的である。録音や録画を用いて、子どもがディスカッション中に、どのような会話に反応してどのような問いかけや答えを行っているかを見ていく。Daniels の LC では、うなずきや、他の人の発言を引き出すことなども積極的に評価している。

③初読－内観及び発話思考法を用いた評価

②のことから、読んでいる途中の状況を、ワークシートに示すことによって、どのように読書が進行するかを評価することができるのではないかと考え、初読の読書過程を内観で振り返るという実験的な調査を行った。ある小説を協力者である大学院生に読ませ、ある程度の場面で区切りながら、どんなことが思い出されたか、どんなことを考えたか、今後の展開はどうなると予想されるかなどを書き留めておき、それを後で話し合いながら、自分の思考過程をたどるというものである。分析は、BC の評価同様、会話分析の手法を用いてみた。本研究で取り組めたのは 3 回の試行的調査であったが、会話分析の手法を初読の内観に関する会話に用いることが可能であることが明らかになった。

これに似た方法で、発話思考法(Think aloud)がある。英語圏の読書に関する文献で、読書過程を分析する手法として登場している。これは、自分がどのように読んでいるか、外から見えない思考過程を口に出して言ってみるという方法である。しかし、この方法は、読書をどのようにしているかを確実に評価できるのであるが、年齢の低い子どもには負担感にある方法であることが明らかになった。

④絵本の発話思考を用いた評価

③を補う方法として、絵本の発話思考についての調査を行った。この方法はアメリカでよく用いられているので、日米での比較研究を行った。その結果、背景知識に基づく推論の組み立てが、読書の本質であることが明らかになった。しかし、これを教室でのあるいは授業で用いることのできる手法として確立するためには、様々な工夫や改善が必要である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 11 件）

①足立幸子、グラフィック・オーガナイザーを使用した情報を活用する読書の指導、月刊国語教育研究、査読有、第 461 号、2010、pp.4―9

②足立幸子、読書活動のコンテクストを子どもに渡すこと、実践国語研究、査読無、第 302 号、2010、pp.11―12

③足立幸子、読みのレベルを診断するベンチマーク・アセスメント・システム、新潟大学教育学部紀要、査読無、第 3 巻第 1 号、2010、pp.1―6

④足立幸子、読書指導力スタンダードに基づく教員研修プログラムの評価、新潟大学教育学部紀要　人文・社会科学編、査読無、第 2 巻第 1 号、2009、pp.1―14

⑤足立幸子、国際児童文学という視点からの

読書指導、教育実践総合研究、査読無、8、2009、pp.35―48
⑥足立幸子、読んで、書いて、話し合う読書の時間、学校図書館、査読無、第 706 号、2009、pp.37―39
⑦足立幸子、マルチリテラシーズ教育を実現する教員養成カリキュラム、人文科教育研究、査読有、第 36 号、2009、pp.37―56
⑧足立幸子、PISA 型読解力と読書指導、指導と評価、査読無、第 655 号、2009、pp.42―45
⑨足立幸子、「熟考・評価」を育てる指導、三省堂国語教育ことばの学び、査読無、19、2009、pp.28―29
⑩足立幸子、読書の魅力を伝える技法、教育と医学、査読無、56、2009、pp.35―41
⑪足立幸子、初等教育段階における読書力評価の国際比較、Sokutei Report、査読無、第 6 号、2008、pp.50―61

〔学会発表〕（計 11 件）
①足立幸子、翻訳絵本の読者反応に影響を与える要因、五大学国語教育合同研究会、2011 年 3 月 2 日、国立オリンピック記念青少年総合センター
②Junko Yokota, Sachiko Adachi, William H. Teale, Japanese and American Educators on Hiroshima No Pika., National Reading Conference/ Literacy Research Association 60th Annual Meeting, 2010 年 12 月 3 日, Fort Worth, U.S. A.
③足立幸子、初読の過程を生かした読書指導、全国大学国語教育学会第 119 回鳴門大会、2010 年 10 月 30 日、鳴門教育大学
④ Junko Yokota, Sachiko Adachi, The Impact of Translated Texts of Picture Books on Reader Response, 32nd International IBBY Congress, 2010 年 9 月 11 日, Santiago de Compostela, Spain
⑤足立幸子、第 55 回国際読書学会年次大会報告、第 54 回日本読書学会研究大会、2010 年 8 月 7 日、全林野会館
⑥足立幸子、国語科教育における初読と再読、全国大学国語教育学会第 118 回東京大会、2010 年 5 月 29 日、東京学芸大学
⑦足立幸子、読みのレベルを診断するベンチマーク・アセスメント・システム、新潟大学教育学部国語国文学会研究大会、2010 年 2 月 20 日、新潟大学教育学部
⑧足立幸子、読書指導力スタンダードの開発と活用、日本読書学会第 53 回研究大会、2009 年 8 月 6 日、筑波大学学校教育部
⑨Junko Yokota, William H. Teale, Sachiko Adachi, International Children's Books: Bridge Across Culture and Countries, International Reading Association 22nd World Congress, 2008 年 7 月 29 日、Ramada Plaza Herradura, San Jose, Costa Rica
⑩Sachiko Adachi,, The Development of Competencies Checklists for Reading Teachers and Reading Specialists in Japan, The 2007 Asian Reading Conference, 2007 年 8 月 5 日, National Olympics Memorial Youth Center
⑪足立幸子、読書力を評価するミクロ・レベル・テスト、日本読書学会第５１回研究大会、2007 年 8 月 4 日、国立オリンピック記念青少年総合センター

〔図書〕（計９件）
①足立幸子、アニマシオン、川崎洋・板東省次編、丸善株式会社、スペイン文化事典、2011、pp.404―405、全 884
②足立幸子、読書の学習指導の方法、全国大学国語教育学会編、学芸図書、新たな時代を啓く中学校・高等学校国語科教育研究、2010、pp.192―196、全 294
③足立幸子、国語学力調査の比較研究、文献案内、全国大学国語教育学会編、明治図書、国語学力調査の意義と問題、2010、pp.142―157、pp.174―180、全 190
④足立幸子、読書指導・読み聞かせ、読書へのアニマシオンの授業、柴田義松・鶴田清司・阿部昇編著、学文社、あたらしい国語科指導法三訂版、2010、pp.81―86、pp.141―146、全 202
⑤足立幸子、PISA とは何であったか―国際テスト・外国の国内テストとの比較から―、望月善次編、明治図書、国語科教育学はどうあるべきか、pp.163―165、全 233
⑥足立幸子、アメリカの教育と学校図書館、ハーバード―イエンチン図書館、全国学校図書館協議会北米学校図書館研究視察団編、全国学校図書館協議会、シカゴ・ボストン・ニューヨークに見る探究学習を支える学校図書館、pp.20―23、pp.122―125、全 143
⑦足立幸子、読書指導、学校図書館での指導、益地憲一編著、建帛社、中学校・高等学校国語科指導法、pp.151―165、p.166、全 255
⑧足立幸子、読書指導、学級文庫の作り方、益地憲一編著、建帛社、小学校国語科の指導、pp.157―170、p.171、全 256

６．研究組織
(1)研究代表者
足立　幸子（ADACHI SACHIKO）
新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授
研究者番号：30302285